ナポレオンの母と妻
—時代を作る女性の力—

高　村　忠　成

1．はじめに——ナポレオンの影

今日は，時代を作る力といたしまして，女性の問題をお話ししたいと考えております。私は，専門が近代フランス政治史でして，本来，女性論ではございません。ただ，ナポレオン研究等々をするなかで，女性のパワーにはいろいろと感じさせていただいておりますので，その観点からお話したいと思います。

ナポレオンという人は希代の英雄といわれております。フランス革命後の混乱した社会を立て直し，自由，平等，友愛という理念を社会に定着させました。フランスの政治組織を組み替え，ヨーロッパを支配し，新しい時代，新しい世紀を築いていったのが英雄ナポレオンです。

ところが，ナポレオンという人をよく観察してみると，その背後には常に女性の影がつきまとっている。これは変な意味でいうわけではありません。ナポレオンは，大変なお母さん子なんです。レティチアというお母さんの影響を強く受けて育っております。お父さんが若くして亡くなってしまいますので，お母さんに育てられるのです。このお母さんが大変に厳格で，躾が厳しい。と同時に，子どもたちに対してはものすごい愛情を降り注ぐのです。子どもから青年時代にかけてのナポレオンは，お母さん子そのものなのです。

やがてナポレオンが，みすぼらしい，うだつのあがらない，一介の青年軍人から，みるみるうちに頭角をあらわす。クー・デターを起こし，大統領になり，皇帝になる。そしてフランス，ヨーロッパを支配する。ナポレオンがどんどん力を発揮し，皇帝にまで上り詰め，いわゆる権力の絶頂期を迎える，その過程にあっては，実は奥さんであるジョゼフィーヌの存在があるのです。彼女と結婚してから，ナポレオンの人生は凄い勢いで開けていくのです。ところが子どもができないという理由で，ナポレオンがジョゼフィーヌを離婚します。そして，オーストリアの后妃，マリア・ルイーズと結婚する。すると，そのあたりからナポレオンの運命は凋落が始まるのです。どんどん落ち込んでいって，戦争にも負け，エルバ島に流され，また再起を図ってヨーロッパを相手に戦うのですが，それにも負けて最後はセント・ヘレナ島に流されて，そこで6年間の生活をおくって亡くなっていくのです。

すなわちナポレオンの生涯は，少年期・青年期には母親に育まれ，自分が力を大

きく伸ばしていくときには妻ジョゼフィーヌの存在があり，ジョゼフィーヌと別れてからは，自分の命運が尽きるというか，どんどん人生が転落していく。そして最後はまた，母親の経済的支援を受けることによって，なんとか立ち直りを図ろうとする。ナポレオンの生涯には，このように，最初は母レティチアが，次には妻ジョゼフィーヌが，そして晩年には母レティチアがつきまとっていたわけです。ナポレオンには英雄というイメージがありながらも，その裏には母親，妻という存在が感じられてならない気がします。

ナポレオンは，約200年前，フランスに革命が起こった中から台頭してまいります。それまでのフランスは，王政という国王を中心とした体制，社会の仕組みでした。身分も生まれながらにして決まっていたのです。自由もなく，平等でもなく，互いの人間としての友愛感にも欠如している。そういう状態が長く続いておりました。そうしたフランスの在り方に対して，1789年に革命が起こります。革命は，絶対王政という政治体制を根本的に覆してしまいます。そして，新しい国家を作ろうとするのです。その国家の基本理念になったのが，自由，平等，友愛という理念でした。

ところがフランス革命は，理想的な革命だったんですが，実は物事はそんなに簡単にはいきません。いろいろありながらも，国王によって，それまでの社会は支えられていたわけです。それをいきなり，国王を捕らえ，そして断頭台の露と消してしまう。王政をなくしてしまうわけですから，その後のフランスの社会は，大変に混乱するわけです。約10年間混沌とした状態が続きます。すると，その中から軍部が力を持ってきまして，そこにいたナポレオンが力を発揮してくるのです。革命後の混乱した社会をナポレオンが平定するのです。彼は，自由，平等，友愛の理念に基づいて新しいフランスの社会を，いわゆる近代国家というものを作ることに着手するのです。ナポレオンは，現代でいう大統領，第一執政という地位に就き，さらには皇帝になります。そして彼は，フランス革命の理念を継承した新しい社会の建設に成功するのです。

しかも彼の凄いところは，フランス国内だけではなく，自由，平等，友愛の理念を，当時のヨーロッパの国々に教えていったのです。ヨーロッパの古い社会の仕組みそのものをも，ナポレオンは変えようとしました。彼のこの業績は，大変なものであると思います。民法典を定め，政教分離原則を確立し，経済を繁栄させました。欧州の統一もはかろうとしたのです。

ちなみにナポレオンがクー・デターによって第一統領という役職に就いたのは1799年です。そして彼が戦争に敗れてエルバ島からセント・ヘレナ島に流されたのが1814年から1815年です。そう考えてみますと，ナポレオンが実際に統治をしていた期間は，わずか15年です。この15年の間に，彼は200年後の今日まで残る偉業をなしとげたのです。ここから大きな仕事というのは，必ずしも年月をかければ良いというものではない。1年でも2年でも，5年でも10年でも，魂を注いで，全魂でやったことは，永遠に残るということがわかります。そういう気がしてなりません。

15年間に彼がやったことが，今日の近代国家，近代社会を形成する基盤になったといっても過言ではないのです。

2．女性観

ナポレオンの数々の業績を考えてみますと，いかにもナポレオンという人は男の中の男だということを実感します。現実にフランスの民法典では，男女平等は謳っておりません。200年前ですからやむをえない点があるのかもしれません。だがそれにしても，簡単にいって，男性が女性を守り，女性は男性に従うという考え方が非常に強いのがナポレオン法典なのです。こういう意味では，ナポレオンの作った社会の仕組みは，近代的な男女平等というよりも，男中心の社会だったという印象は免れません。

ところが男性中心というイメージのするナポレオンも，一歩下がって，実生活という点からみますと，非常に強く女性の影響を受けております。彼は，母親，妻に頭があがらないのです。また，ナポレオンという人は，女性に対しては，大変に優しい面がありました。女性をいじめるとか，女性を弾圧するとか，女性を無下にするとかいうことはないのです。何分にも今と時代が違いますから，法的には，また物の考え方では，若干，女性は男性に付き従うものだという面はあります。ただ実質的な力という面からいいますと，ナポレオンを形成し，動かし，また彼が一番気を配っていたのは，実は女性なのです。

そこで，今申し上げたことを，ナポレオンの言葉から紹介してみたいと思います。彼は，母親について，何回も繰り返しいっております。

「私の幸運は，そして私の為し得た全ては，母のお陰である」

「偉人をつくるもの，それはひとえに，母である」。

「子どもの立派な行為であれ，あるいは良くない行為であれ，その全面的な責任は，母親にある」と。

またナポレオンは，妻についても，分析しています。後に彼がセント・ヘレナ島に流されたときに，自分の一生を振り返ります。そして，なんで一介の，コルシカ島という地中海に浮かぶ，小さな島の貧乏貴族から，自分が身を起こし，皇帝にまでなることができたのであろうか。彼は自己分析をします。そして，6つ理由をあげるのです。一番目に，父親が早くに亡くなったこと。そのために自立心が備わった。二番目に，フランス革命が起きたこと。そのために新しい時代のうねりに飛び込むことができた。三番目に，自分の家が金持ちでも名家でもなかったこと。そのために革命の犠牲にならなかった。四番目に，ジョゼフィーヌと結婚したこと。これを強調しているのです。五番目に，兄弟が多かったこと。六番目に，外国出身であること。コルシカ島はナポレオンが生まれる前の年までは，イタリアのジェノバ共和国の島だったんです。彼が生まれる一年前に，ジェノバ共和国からフランスに売り渡されました。こうしたことから，彼は外国出身であったと考えていました。そのため旧いしきたりにとらわれることなく，フランスに新しい社会，新しい国家

を作ることができたといっているのです。

いずれにせよナポレオンは，自分がなぜ皇帝になれたのかということを分析して，以上のような理由を挙げておりました。そのなかでも，特にジョゼフィーヌに関しては，途中で離婚をしてしまいますけれども，最後の最後まで彼女を慕っておりました。彼は次のように言っております。

「私はジョゼフィーヌを深く愛していたと思う。私は彼女とともに自分の地位を築いてきた。彼女は私が選んだ本当の女性だ」と。

このように，ナポレオンの伝記，回顧録を見ますと，彼は母親レティチアと最初の妻ジョゼフィーヌについて多く書いているのです。実に，こう考えてみますと，あの英雄ナポレオンを作ったのは，二人の女性にあったといっても過言ではないという気がいたします。

3．母レティチア

そこで「母」レティチアのことから話していきたいと思います。

母レティチアは，1749年，コルシカ島で生まれました。14歳で結婚します。相手はシャルル・ヴォナパルテ。18歳のピサ大学を出た弁護士，下級貴族です。ヴォナというのは「良い」，パルテというのは「側」という意味です。すなわち，「ヴォナパルテ」という言葉には，「善良な側」，「正しい派につく者」というような意味があります。ところが，お父さんは1785年に39歳で病死してしまいます。したがって，残された子どもたちはレティチアの手によって育てられるのです。

ちなみに，レティチアとは，日本語で「喜び」，「歓喜」，あるいは「夜明けの光」という意味です。夫に若くして死なれてしまったですが，彼女は大変に気丈な，芯のしっかりした女性でした。コルシカ島きっての美人であったともいわれております。彼女は多くのコルシカの女性と同じように，だいたい13，14，15歳くらいで結婚します。したがって，いわゆる学問的な力ではそれほどレベルは高くありませんでした。しかし，持って生まれた本質的な頭の良さ，知性という点では大変に優れたものがあったようです。しかも彼女は男勝りの偉丈夫といってもよかった。特にコルシカは，イタリアから独立し，フランスからも独立しょうとするのです。若きレティチアも，夫たちと独立運動に，女性の身でありながら，参加するのです。妊娠している時も，彼女はロバにまたがって，行進し続ける。そして，どんなことがあっても，コルシカの独立のため，もし必要ならば私は最後の一人になっても戦います，とレティチアはいうのです。まさに崇高な革命の理念に生き抜いた女性であったと，いえましょう。

レティチアは，子どもの躾に関しては大変に厳しかった。ナポレオンは，後に，自分の教育の大半は母から受けた，と述懐しておりますけれども，彼女の教育の本質はどこにあったか。それは，「嘘をついてはいけない」，「人に迷惑をかけてはいけない」とかという簡潔な点にありました。

ある時，ナポレオンの祖母が足が不自由で，ナポレオン少年はその祖母の後から，

祖母の歩き方を真似をして妹と歩きました。その姿を見たレティチアは彼を捉え，「いつからそんな卑怯者になった」といって厳しく誡めたのです。

またある晩，ナポレオンは土砂降りの雨のなかを，行ったり来たり歩いておりました。レティチアが，「早く家のなかに入りなさい」といっても，彼はいうことを聞かずに雨のなかを歩き続けました。やっと家のなかに入ってきた時には，もう全身ずぶぬれです。滴が部屋のなかに滴り落ちるほどでした。ナポレオンはレティチアにいいます。「ごめんね。僕は兵隊になりたいんです。兵隊になるには，どんな酷い天気にも耐える必要があります。だから僕は，雨に打たれることで，どんな天気にも慣れておきたかったんです」と。

するとレティチアは，「でも兵隊になりたいんだったら，命令は聞かなきゃだめだよ」といい返します。彼女は毅然としていたのです。

そして，ナポレオンが偉くなった時です。彼も気取る点があるわけです。何かにつけて自分の行動を美化して，えらく見せようとするのです。彼がある時，「余は，古代ギリシアの英雄が画かれた絨毯の上に産み落とされた」，と胸を張っていいました。それを聞いたレティチアは，「何をいっているんです」，「そんなのは作り話です」，「第一，コルシカ島の私の家には絨毯なんかありませんでしたよ」と否定します。彼女はどこまでも，「真実である」ことを子どもたちに教え，植え付けたのです。

やがてナポレオンは，ブリエンヌの幼年学校からパリの陸軍士官学校に進み，そこを卒業して憧れの軍に入ります。しかし，それはまだ革命が起こる前でした。当時のフランスの軍隊は，ほとんどが貴族の子どもたち，いわゆる上流階級の子弟でしめられていました。その中でナポレオンは，まったく地方出の，下級・貧乏貴族の子どもでした。しかも，陸軍士官学校時代の成績はそんなに良くありません。背も低く，貧弱でした。まったくうだつのあがらない一軍人だったのです。友だちからのイジメにもあいます。さすがの彼も弱音を吐きます。彼はパリの軍隊に身を置きながらも，何かにつけて故郷コルシカのことに思いを馳せます。コルシカの独立のことだけを考えていました。彼はしょっちゅうコルシカ島に里帰りします。何かあるとすぐ母親のもとに帰ってしまう。そして，自分の軍隊生活でのみじめさなど弱音を吐くのです。その時，レティチアは優しく激励する。「不運に負けないことが，立派で高貴なことなんだよ。不運はかえって幸福となる。おまえはこれを信じるかい。お前を追放する命令も，やがては輝かしい栄誉の証言になるよ」，といって彼を励ますのです。

レティチアのナポレオンを躾ていく言葉の数々のなかで，また彼女の行動のうえで，一点いえることは，彼女は決して愚痴をこぼさない。愚痴めいたことは一切いわない，ということです。まして誰かを恨んだり，卑下したり，自分自身を自暴自棄に追い込んだりしないのです。常に毅然としていました。こうした母親の姿勢にナポレオンは大変に強い影響を受けるのです。

母レティチアは，自分の夫のみならずナポレオンにも，人生の時々において大きな影響を与えました。まず夫シャルル・ヴォナパルテがコルシカ島の独立運動を戦

っているときに，コルシカ島はフランスからも独立できない，いっそのことイギリスに亡命しようかと思います。独立運動の指導者でパスカル・パオリという人がそう判断するのです。ところが，その話を聞いたレティチアは，「それはいけない。イギリスに亡命したからといって，コルシカ島の独立が保証されるわけではない。あくまでもコルシカ島に留まって，フランスと交渉して，コルシカ島の立場を独立したものにしていくのです」と，夫に説得するのです。もしこの時，レティチアが夫を説得しなければ，一家はイギリスに行っていたかもしれません。イギリス人になっていた可能性があるのです。そうしたら，英雄ナポレオンは生まれなかったかもしれません。ボナパルト家の運命を大きく変える判断をしたのは，レティチアであったといえましょう。

また，ナポレオン自身の運命もレティチアの助言で変わります。彼は軍隊のなかで一生懸命仕事をしていましたけれども，なかなか認めてもらえません。当時，フランスの軍隊は，なんといっても陸軍が中心でした。海軍はあまり強くなかった。そこでナポレオンは，どっちみち陸軍にいてもうだつがあがらないなら，自分はコルシカ島という島で育ったんだし，海のほうが自分には向いているんじゃないか。陸軍ではなく海軍に行こうかと思うのです。彼はレティチアに相談します。「お母さん，私は陸軍ではなく海軍へ行く。海軍の軍人となって戦いたい」と。するとレティチアは断固としてそれに反対します。「それはいけない，海軍はだめです」と。ナポレオンは，なぜ母親がそんなに反対するのかわからない。「お母さん，なぜいけないんですか」と聞くと，「海軍で海だったら何かあったら逃げられない」と答えました。この時も，もしレティチアがナポレオンが海軍にいくことに賛成したら，彼が砲兵隊の隊長となり，イタリア遠征軍の指揮官となって，その頭角を現わしていくということは，まずなかったと思います。

このようにレティチアは，ボナパルト家の命運を決めるという重大な判断を下すときも，またナポレオンが陸軍か海軍か，どっちの道を選ぶかというときにも，非常に大きな影響を与えていたのです。

また，レティチアは，ナポレオンがどんどん出世していくと周りの人からいろいろとほめたたえられます。「お宅の息子は素晴らしい，ナポレオンは素晴らしい」と。ところが，彼女は，そういうような毀誉褒貶には流されず，「いつまでこういうことが続くんでしょうかね」,「こんなことは決して長く続くものではありません」と，平然としていました。レティチアの脳裏のなかには，幼い子どもを背負いながら，コルシカ島の独立運動に身を挺し，また貧しい家計を支えるために一生懸命働いてきた。その思い出しかありません。そこから，真剣に，懸命に生きていくところに人間の価値がある，との信念が彼女にはそなわっていたのです。彼女には，皇帝の戴冠式とか，自分の息子が皇帝になったとか，そのようなことは嬉しいことでも何でもなかったのです。こんな栄誉はいつかは崩れるに違いないと思っていました。そのため彼女は，何か困ったことがあったら大変だということで，生活は質素に，皇帝の母としてもらうお金も貯金し，慎ましい生活を送っていました。

ナポレオンは皇帝になると，自分の兄弟姉妹たちをいろんな国の国王や王妃に据

えたりします。そういう姿を見てレティチアは，冷たくいい放ちます。「あなた方は自分たちが何をやっているのかわかっているのですか。世の中はいつまでも同じように続くものではありません。もしあなたがたが私を頼りにこの胸に飛び込んでくるようなことがあれば，その時にはあなたがたも私が今やっていることに感謝するでしょう」と。こういってレティチアはお金を貯め，何かあったときに子どもたちのために使おうと，慎ましい生活をおくるのです。

レティチアのこうした態度は，後に非常に大きな結果となって現れます。ナポレオンが後年，戦争で敗れてエルバ島に流されます。皇帝の地位も追われます。その時にレティチアは自分の蓄えてあった1300万フラン，これをナポレオンに差し出します。日本円で約65億です。ナポレオンはこの資金をもとに，再び挙兵したのです。

彼は，パリで態勢を立て直し，いよいよワーテルローの戦いに臨みます，そこでイギリス軍やオーストリア軍，そしてプロシアの軍隊と衝突するのです。最終的には，ウェリントン将軍率いるイギリス軍にナポレオンは負けてしまいます。そして皇帝としての退位が決まり，大西洋上のセント・ヘレナ島に流されます。いよいよフランスを去る時，ナポレオンは長らく妻ジョゼフィーヌと住んでいたマル・メゾンという館を後にします。その時，レティチアはこれがナポレオンとの永遠の別れになるかもしれないと考え，喪服を着て彼を見送りました。

ナポレオンと母レティチアとの関係を考えますと，両者の関係が誠に深かったということがわかります。ナポレオンはセント・ヘレナ島でも，「私の考えでは，ある子どもの将来の立派な行為にせよ，あるいは邪な行為にせよ，それは全面的に母親による」と述べています。また，「母は私の幼少時代から厳しい愛情を注ぎ，偉大なことしか考えないように気を配ってくれた。もし私が幸運に恵まれていたとするならば，そして私が世の中に役に立つようなことをしたとするならば，それはすべて母がその原則的なことをしっかり教えてくれたからだ」とも綴っています。

ナポレオンの母レティチアは，ナポレオンが死んだ後も，15年長く生きて，1836年，86歳でなくなりました。彼女は晩年，次のように回想しています。

「みんながこの私を世界一幸福な母親といってましたけれど，私の人生は不安と苦しみの連続でした。郵便が着くたびに，私はいつも，戦場でのナポレオンの死が告げられているのではないかと恐れていました」と。

レティチアは，あくまでも謙虚に，自分の人生というのは決して世界一幸福な母親というようなものではない。いつも不安と苦しみの連続だった。手紙が来るたびに「皇帝ナポレオンが戦死した」という報告が来るのではないか。そういう恐ればっかりだったと，述べているのです。しかし，レティチアは最後まで毅然と生き抜いていました。ナポレオンがセント・ヘレナ島に流された後も，「自分の全財産をセント・ヘレナ島のナポレオンの所に送るんだ」といい放ちました。周りの人が，「そんなことをしたら，あなたの生活が困りますよ」と，心配しました。その時彼女は，「かまうもんですか。何もなくなったら，『私はナポレオンの母です。この母にお恵みを』といって歩きますよ」といって，子どもへの深い愛情を示したのです。

セント・ヘレナ島に流されたナポレオンに対しては，イギリスをはじめ，当時彼によって敗れた国々が一斉に批判し，悪口を書き，「コルシカの食人鬼」というような風評を流しました。ナポレオンを中傷する小冊子や宣伝が出回るなかでも，彼女は平然として，「私は私です」，「ナポレオンの母です」，こういって毅然として生き抜きました。ナポレオンが最後まで頼りにしていたのは母親であった，といっても過言ではありません。彼は権力の絶頂期にあったときも，心静かに耳を傾けたのは母親の意見であり，また，ややもすると行き過ぎる点があったナポレオンを誡めたのもレティチアでした。ナポレオンは次のようにいったことがあります。「母には正しい判断力が備わっている。したがって，王国を一つ統治することも可能であったであろう」と。

文豪スタンダールは，レティチアのことを大変に尊敬しまして，「レティチア・ボナパルト夫人の生涯ほど，偽善に染まらない，そして私の考えるところ，高貴な生涯というものはないのではないか」と，賛嘆いたしました。このように母レティチアなくしてナポレオンの存在は，ある意味ではなかったのではないかといっても過言ではないと思います。

4．妻ジョゼフィーヌ

つぎに「妻」の存在へと移っていきたいと思います。

ナポレオンの妻ジョゼフィーヌもまた，彼が冴えない，何の変哲もない軍人から第一統領になり，皇帝になり，そしてヨーロッパ全土を治めていく，その上昇気運のなかにあった時に彼を支えました。

彼女は1763年，カリブ海のマルチニック島という島で生まれました。1763年生まれといいますと，彼女はナポレオンよりも6歳年上です。彼女は1779年，16歳の時にフランスに渡ります。彼女もナポレオンと同じように島の貧乏貴族の娘でした。それが親戚を頼ってパリに来て，20歳のときに子爵アレクサンドル・ボーアネルという貴族と結婚します。そしてウージェニーという息子とオルタンスという娘をもうけます。フランスに来てからは，彼女は上流貴族の夫人として，「社交界の華」といわれるくらいの華やかな生活を送っておりました。

ところが，ジョゼフィーヌにも大きな転機が訪れます。それはフランス革命でした。革命が勃発したため，国王や貴族の生活は一変してしまいました。彼女の夫ボーアネルも，1794年に逮捕され，ギロチンで首を刎ねられてしまいます。ジョゼフィーヌも，もうあと数日後に処刑されるところ，「テルミドールの反動」という反革命が起こり，釈放されることになりました。間一髪のところで彼女は助かったのです。

しかし，彼女は夫を失って，二人の子どもを抱える未亡人になります。その彼女が1795年，ナポレオンと出会うのです。そして，彼の求愛を受けて結婚するのです。

因みに，これまで「ジョゼフィーヌ」とか「ナポレオン」とかいってきましたが，

実はこの名前は二人が出会って結婚するまではそれぞれ違っておりました。どういうことかと申しますと，「ジョゼフィーヌ」というのは「マリー・ジョセフ・ローズ」というのが本名です。友だちや社交界では「ローズ夫人」と呼ばれていました。ところがナポレオンには面白い癖があり，自分の好きになった女性を，自分好みの名前にしてしまうという習慣がありました。彼は，「ローズ夫人」に対しても自分の好きな名前に変えてしまいます。すなわち「マリー・ジョゼフ・ローズ」であった名前を「ジョゼフ」を強調して「ジョゼフィーヌ」と変えたわけです。またナポレオン自身も，ジョゼフィーヌと結婚するまでは，「ナポレオーネ・ヴォナパルテ」というイタリア式の名前で名乗っていました。ところがナポレオンはジョゼフィーヌというフランスの元貴族，上流階級に顔の広い，自らが名前をつけた彼女と結婚することによって，自分も本当のフランス人になろうと決意します。そして，名前を「ナポレオン・ボナパルト」とフランス風に呼ぶようにしました。すなわちジョゼフィーヌとナポレオンというこの二人は，それぞれ結婚を契機に「ジョゼフィーヌ」，「ナポレオン」という名前に変えたのです。

ナポレオンとジョゼフィーヌは，元々身分も立場も全く違います。ジョゼフィーヌは社交界，貴族社会きっての花形の婦人でありました。それに対してナポレオンは，軍服も似合わなければ見栄えも良くない，身体も小さい，冴えない，青白い顔をしている，そういう全くうだつのあがらない存在でした。ジョゼフィーヌとナポレオンは出会った時のことを比較しますと，全く共通点が無いようでした。ところが，よく調べてみますと，二人には不思議な共通点があるのです。すなわち，フランス革命がなかったならばこの二人は巡り会うことはなかっただろうし，また，その出生においては共に下級貴族の子どもであった。しかもナポレオンはコルシカ島，ジョゼフィーヌはマルチニック島という，両方とも島の出身であした。コルシカ島はナポレオンが生まれる１年前にイタリア領からフランス領になりました。マルチニック島という島も，ジョゼフィーヌが生まれる９日前にイギリス領からフランス領になったばかりでした。一歩間違えれば，コルシカ島はイタリア，マルチニック島はイギリスのものということで，二人が出会うことはなかったと思うのです。ところが運命の糸が二人をめぐりあわせるかのように，２つの島はともに外国の領土からフランス領になったのです。ちなみに，ジョゼフィーヌは子どもの頃に，マルチニック島のある女占い師から，「おまえは将来，王妃以上の存在になる」と予言されたといわれています。

一見すると，立場も身分も違うように見える二人ですが，しかし，その淵源を辿ってみると案外共通点がある。では，この二人はどうやって出会ったのでしょうか。出会いは1795年10月のことでした。革命で倒された王党派は再び勢力を立て直そうと，いわゆる「ヴァンデミールの反乱」を起こします。この反乱は失敗しますが，革命政府は，王党派が残っていることに危惧を抱き，武器を全部没収してしまいます。そのなかでジョゼフィーヌの夫の形見の刀も没収されてしまいます。ジョゼフィーヌと子どもたちは，亡き夫あるいはお父さんの形見の品を大変に恋しがります。なんとか形見の刀だけは返してもらえないだろうかと親子は嘆くのです。そのよう

な時，誰かの口利きで，ジョゼフィーヌの子どもである男の子，すなわちウージェニーがナポレオンを訪ねてきます。そして亡くなったお父さんの形見の品をなんとか返してもらえないだろうかとナポレオンに頼みます。ナポレオンは「わかった」といって，形見の刀をとり戻してあげます。交渉してかえしてもらえるように段取りをつけてあげたのです。これに対してジョゼフィーヌは大変に喜びまして，ナポレオンの家にわざわざ御礼に来ます。

ところが，彼女が最初にナポレオンに会ったとき，その身なりがあまりにもみすぼらしく，軍服が似合わず，しかも冴えない顔をしているので，最初はその家の給仕かなにかと間違えたらしいのです。「ナポレオンにお会いしたい」といった時に，「私がナポレオンです」と彼は答え，二人は初めて出会うのです。したがって，ジョゼフィーヌはナポレオンに会っても何とも思わない。何も感じないのです。痩せた小男で面白い話をしてくれるわけでもない。かといって財産があるわけでもない。ジョゼフィーヌは，ただお礼だけをいいました。

ところが，ナポレオンはジョゼフィーヌを見た時に，「一目惚れ」しました。物腰，雰囲気，優しさ。あらゆる点から彼は一目惚れをしてしまったのです。そしてナポレオンとジョゼフィーヌの付き合いが始まりました。

因みに，ジョゼフィーヌはそれほど，美人ではなかったといわれております。ただ，明るく温かな人柄，またその振舞いが非常に優雅でした。しかも大変に愛想が良い。声が美しい。さらにナポレオンは，「ジョゼフィーヌといると心の安らぎを覚える」といっております。彼女は学問があるとか，知性が優れているとか，そういうような面ではない。なんともいえない，自然に人の心を掴んでしまう，また捉え所の無い無邪気な中にも，愛想が良い，しかもそばにいると安心できる，そういう雰囲気があり，それらがナポレオンを包んでしまったのです。

かくしてナポレオンは，いっぺんにジョゼフィーヌに熱をあげてしまいまして，やがて求婚します。しかし，彼女はナポレオンに対しては最初は別に何も感じなかったのです。彼は「是非とも結婚を」と迫ります。するとジョゼフィーヌも，最初は結婚しようという意志はなかったんですけれども，だんだん彼の熱意に押されていきます。この頃の心理状態をジョゼフィーヌは手紙に書いています。「（友だちに対して）あなたは私がナポレオンに対してどう思っているかお尋ねですけれども，私がお答えするには，私はナポレオンのことを好きでも嫌いでもありません。ちょうどぬるま湯に浸かっているような状態です。ただナポレオンが誠実であるということ，それから非常に情熱的であるということ，ここに私は心を動かされます」と。好きでも嫌いでもない，ぬるま湯に浸かっている状態である。ただ敢えて良いところをいうならば，彼が誠実である，大変情熱的である，ここに私が心を惹かれる点が少しあります，と彼女は答えているのです。

そして，こうしたジョゼフィーヌにもだんだんと打算が働いていきます。私ももう32歳だし，二人の子どももいる。生活も苦しい。いつまでこのような生活が続くんだろうか。あまりうだつのあがらない軍人だけども，ここらで手を打ってもいいかな，という計算が彼女に働くのです。そして二人は結婚します。

結婚のときのエピソードです。役場に二人は結婚届けを出しますが，ジョゼフィーヌは32歳でした。しかし彼女は4歳年下にサバを読みます。28歳にするんです。ナポレオンは26歳でした。彼は2歳年上にサバを読みます。すなわち28歳。二人が役場に届けた結婚届では，ともに28歳でした。

もう一つのエピソードです。ナポレオンとジョゼフィーヌが結婚するということを知った母レティチアは，いわゆるコルシカ島の伝統と気風のなかで生きてきた女性ですから，「なに，32歳。6歳も年上の，しかも未亡人。とんでもない」といって，この結婚に大反対します。でもナポレオンは反対されるということがわかっていましたから，母レティチアにはこの結婚を知らせませんでした。知らせないで結婚の届けを出す。自分の友人だけを呼んで結婚式を挙げてしまう。後に母レティチアは結婚の報告を聞いて激怒しました。

このように結婚のときにはゴタゴタがありました。でもナポレオンはジョゼフィーヌと結婚して満足でした。ところがジョゼフィーヌの方は，いわゆる「ぬるま湯」のような状態で結婚しましたから，結婚した後もナポレオンに対して，最初は別にそんなに深い愛情を注がなかったのです。しかも，結婚式の2日後からナポレオンはイタリア遠征軍の総司令官になってイタリア遠征に行ってしまいますから，新婚早々，二人の生活は離れ離れでした。ナポレオンはイタリアに向かう途中から，またイタリアの地から，それこそ毎日のようにジョゼフィーヌに手紙を出します。

「私の幸福は君が幸福であるということだ。私の喜びは君が陽気であるということだ。私の楽しみは君が楽しみを持っているということだ。これ以上の献身と情熱と愛情とをもって愛された女はかつていなかった」

「私の命である妻よ。どうして私が寂びしがらずにいられようか。君からの手紙は来ない。私は君の手紙を4日おきにしか受け取らないのだ。君が私を愛しておくれだったら，日に二度は手紙を書いてくれたであろうに」。

こういう感じで，ナポレオンの妻ジョゼフィーヌに対する手紙というものは，烈々たるものでした。ところがジョゼフィーヌは手紙を書くどころか浮気をするのです。ナポレオンが居ない間に若い貴族の男を相手に飛び回っているのです。ただ，彼女がナポレオンに手紙を1通も書かなかったという理由は，一説によると，ナポレオンの字があまりにも汚いので，読むのが面倒臭さかったといわれています。ともあれ，ナポレオンのジョゼフィーヌに対する愛は非常に深いものがありました。

ところが，年表を追って見ていただくとわかるんですが，ナポレオンはジョゼフィーヌと結婚してからどんどん道が拓けていきます。まるで運命が変わったように，イタリア遠征軍の総司令官になり，イタリアでの戦争も連戦連勝なんです。したがって周りの兵士たちは，ナポレオンがジョゼフィーヌを熱烈に愛していることを知っていますから，「ジョゼフィーヌこそ勝利のマドンナ，聖母である」といって彼女をたたえました。じつに，ジョゼフィーヌは「幸運の女神」でした。

ところが，それほど熱を上げたナポレオンは，ジョゼフィーヌがどうも浮気しているらしい，という話が兄とか弟からの報告によって入ってくるにしたがって，だんだんとその熱がさめていきます。かつてほど，「ジョゼフィーヌ」「ジョゼフィー

ヌ」といわなくなっていくのです。ところが逆に，ジョゼフィーヌの方は，どうも自分が結婚した男はただ者ではないようだと感じるようになります。今度は彼女の方がナポレオンに対して尊敬の念を高めていくのです。

なんだかこういうと，ジョゼフィーヌが男性の運命を押し上げるような，神秘的な力を持っていたという，気がしますが，そうではないのです。実は彼女の持っている力が，ナポレオンが権力の頂点に達するにしたがって，発揮されるようになっていくのです。といいますのは，彼女は心優しい，温かさ，包容力をもっていました。また革命前は貴族の上流社会のあらゆるところにその勢力を延ばしていた女性です。一方ナポレオンは，貴族社会を知らない，上流社会に無知な，貴族のマナーや上流社会の態度・振る舞いがわからない青年でした。ところがナポレオンの立場がどんどん上がっていくにつれて，上流社会のしきたりを知ることが必要になってくる。その時，ジョゼフィーヌの力が大きく発揮されるのです。上流社会の人脈，そこでの振舞いが役に立つのです。ナポレオンには想像すら尽かないことをジョゼフィーヌは無難にこなしていくのです。したがって，単にジョゼフィーヌが運が良い，運をもたらす女性であるというような神秘的な側面だけではなく，かつて彼女が貴族・上流社会で幅を利かせていた，その頃の，華やかなファースト・レディとしての経験が，今度はナポレオンの妻になってからも，生きてきたのです。こうしたジョゼフィーヌの力によって，ナポレオンは上流社会においてもその力を発揮することができるようになったといわれているのです。

ナポレオンの女性観については，先ほどもちょっと触れましたが，なんといっても母レティチアから受けたイメージが非常に強い。すなわち，女性は子どもが多い方が良い，女性は家庭をしっかり守るべきである，女性が政治とか公務とか，そういう公の場にはでない方がよい，というようなものです。現代の観点からいうとやや古いかもしれません。ただし，ナポレオンは，女性に対しては優しく，独立した人間としての人格は，認めていました。

彼は後に，セント・ヘレナ島で女性について語っています。すなわち，「私は女性と充分に対話できなかったことを後悔している。女性からは，男たちが敢えて私に語ろうとしない多くのことを学ぶことができる。女性には全く特別な独立性があるのだ」と。女性から学ぶべきものは非常に多いというわけです。

ナポレオンとジョゼフィーヌの結婚生活は14年間続きました。この期間，ナポレオンは，その運命を一気に切り開くように，社会においても，世界においても，大きく自分を伸ばしていきます。しがって，当初ナポレオンはジョゼフィーヌを大変大事にしましたが，その権力の絶頂期に差しかかると，どうしても気がかりなことがありました。それは，ジョゼフィーヌとの間に子どもができないということでした。最初彼は，彼女との間に子どもが生まれないのは自分の責任であると思っていました。というのは，ジョゼフィーヌには子どもがいたからです。ところがある時，転機がおとずれます。1807年ですが，ナポレオンがロシアから圧迫されていたポーランドを助ける。そのときポーランドの貴族の婦人と知り合いになるのです。ワレフスカというポーランドの女性なんですけれども，その女性と一夜を伴にしたこと

により，彼女との間に子どもができるのです。そこでナポレオンは，自分でも子どもができるんだということが分かって，一気に自分の本当の子どもが欲しくなる。嫡子を望むのです。そのため，1809年，ナポレオンはジョゼフィーヌとの離婚を決意しまして，そのことを彼女に告げます。

ナポレオンから離婚を告げられたジョゼフィーヌは，あまりのショックに床に崩れ落ちたといわれております。彼はジョゼフィーヌに離婚の理由をきちっと話して，別れるのです。

あくまで世継ぎである子どもが欲しいために離婚するのであって，ジョゼフィーヌが憎くて離婚するわけではない，と説明します。そのため，ナポレオンはジョゼフィーヌの生活に対しては最大の配慮をします。またジョゼフィーヌのことを「永遠にわたるフランス皇后」と名乗って良いと許可します。マル・メゾンの館と今日のフランス大統領の官邸になっているエリーゼ宮殿を彼女に与え，年額300万フランのお金を保証します。日本円で約15億です。このような最大の配慮をしてナポレオンはジョゼフィーヌと離婚します。そしてオーストリア皇帝の娘，マリア・ルイーズを新しい王妃として迎え，彼女との間に待望の男の子をもうけます。ナポレオンはその子に「ローマ王」と名付けて，大事に育てます。一方，マル・メゾンの館にひきこもったジョゼフィーヌはナポレオンとの思い出を大事にします。机の上にはナポレオンが開いた本をそのままにし，ナポレオンの地図には彼が記した印を残しました。ナポレオンの脱いだ服も脱いだままにし，ナポレオンが居たのと全く同じ状況にマル・メゾンの館を残したといわれています。後世その部屋を見た人たちは，今でもナポレオンが生きているのではないかという感想を懐いたほどです。ジョゼフィーヌはナポレオンとの思い出をいつまでも大事にしたのです。

一方，ジョゼフィーヌを離婚してしまったナポレオンに対して兵隊たちは大変残念がります。兵隊たちは優しいジョゼフィーヌのことを「年寄り」「おばあさん」といって，いつまでも偲びます。「皇帝は年寄りから離れるべきではない」，「皇帝はジョゼフィーヌから別れるべきではない」，「彼女は皇帝に幸運を運んでくれたし，我々にも戦運をもたらしてくれた。ナポレオンはジョゼフィーヌを離別すべきではなかった」というのです。

ともあれ，ナポレオンは新しい妻マリア・ルイーズとの間にうまれたローマ王を非常に大事にします。ジョゼフィーヌはナポレオンとマリア・ルイーズとの間に子どもが生まれたことを聞いて，大変喜び，会うことを希望します。その願いは叶い，1812年，ジョゼフィーヌが亡くなる２年前にナポレオンの子ども，ローマ王と彼女は面会します。その時，彼女はローマ王の顔をじっと見ながら涙を流していいました。

「可愛い坊や，私があなたのためにどんな犠牲を払ったか，いつかあなたにも分かる日が来るでしょう」と。

不思議なことに，ジョゼフィーヌと別れて後のナポレオンの運命というのは，急落の一途を辿ります。戦争に敗れ，エルバ島に流され，最後はセント・ヘレナ島で客死するのです。

その後歴史は興味深い展開をします。ナポレオンの子どもローマ王は，21歳で肺炎で亡くなってしまいます。ジョゼフィーヌと離婚してまでもうけた彼の子は21歳で世を去ってしまうのです。ジョゼフィーヌも1814年，ナポレオンがエルバ島に流された後，肺炎がもとで51歳の生涯を閉じます。ナポレオンも51歳で亡くなります。ところがジョゼフィーヌには二人の子どもがいました。ウージェニーとオルタンスです。このジョゼフィーヌの娘，貴族の前夫との間の娘オルタンスは，後にナポレオンの弟ルイと結婚するのです。そして二人の間に子どもが生まれます。これがルイ・ナポレオン・ボナパルトといって，後にフランスの皇帝となり，第二帝政を開きます。じつにジョゼフィーヌの孫がフランスの皇帝となりナポレオン王朝の再建に尽すのです。しかも，ナポレオン三世の外務大臣として活躍するのがナポレオンとあのポーランドのワレフスカ夫人との間に生まれた子ども，ナポレオンの実子です。実にナポレオンの家系といいますか，その流れには興味深いものがあります。

なお，ナポレオンとマリア・ルイーズとの間に生まれた子供ローマ王は，21歳で亡くなるまではすくすくと育ちました。聡明な青年として成長していたのです。オーストリア政府は彼を絶対にフランスに戻すな，オーストリアの管轄下に入れておくとしたのです。ローマ王は，図書館でナポレオン関係の史料を読み漁り，自分の父親がどういう人であったのか，どのような活躍をしたのかを調べます。そしてある時次のように述べます。

「もしジョゼフィーヌが私の母親だったら，父がセント・ヘレナ島で埋葬されることはなかったであろう。また，この私がウィーンに来ることもなかったであろう。私の母親マリア・ルイーズは善良だが弱い女性だ。彼女は私の父に相応しい妻ではなかった」と。

実にナポレオンが権力の絶頂期にまで一気に這い上がっていく，その背後にはジョゼフィーヌのなんともいえない力が働いていたといえます。ジョゼフィーヌは，1814年5月，肺炎のためにマル・メゾンの宮殿で亡くなります。彼女が死ぬ間際に残した言葉は，「ボナパルト，エルバ島，そしてローマ王」だった，といわれています。彼女の夢は，ナポレオンと一緒に動物園を開きたい，そこで子どもたちを喜ばしてあげたい，ということでした。彼女は最後まで夢見て，ナポレオンとともにその生涯を歩むことを理想としていたといわれております。

一方ナポレオンの最後の言葉，すなわちセント・ヘレナ島で彼が亡くなる時に残した言葉は，「フランス，先頭，軍隊」そして「ジョゼフィーヌ」でした。

実にナポレオンの人生はジョゼフィーヌとの結婚とともにその栄光の道が開かれました。こう考えますと，男性の人生にとって女性の存在がいかに大きなものであるか，ということがわかります。ナポレオンとジョゼフィーヌは結婚した時から二人の道は大きく開け，その人生は栄光の道を歩むことになりました。そして，二人が別れてからは，共にその力を失っていったということがいえるのではないかと思うのです。

5．結語

希代の英雄といわれたナポレオン。そのナポレオンの人生を形成してきた背後には母レティチアと妻ジョゼフィーヌの力が大きく働いていました。そのことをナポレオン自身の言葉によって裏付けながら紹介してまいりました。じつに，時代を作るのは，ある意味では女性の力といえましょう。

※本稿は，平成15年８月23日（土），創価大学池田記念講堂で開催された，夏期大学講座での講演です。

参考文献

高村忠成『近代フランス政治史』（北樹出版，2003年）
オクターヴ・オブリ編（大塚幸男訳）『ナポレオン言行録』（岩波書店，1983年）
キース・アディ（木村尚三郎・福田素子共訳）『ナポレオン』（西村書店，1989年）
ロジェ・デュフレス（安達正勝訳）『ナポレオンの生涯』（白水社，2004年）
安達正勝『ナポレオンを創った女たち』（集英社新書，2001年）
アラン・ドゥコー（小宮正弘訳）『ナポレオンの母　レティツィアの生涯』（時事通信社，1988年）
ジャック・ジャンサン（瀧川好庸訳）『恋するジョゼフィーヌ　ナポレオンとの愛』（中央公論社，昭和57年）
安達正勝『ジョゼフィーヌ　革命が生んだ皇后』（白水社，1989年）
Lucian Regenbogen, *Napoléon A Dit. Aphorismes, citations et opinions Préface de Jean Tulard*, Les belles Lettres, 1998.
Jean Tulard, *Napoléon ou le mythe du sauveur*, Fayard, 1997.
Evangeline Bruce, *Napoleon and Josephine. The Improbable Marriage*, A Lisa Drew Book Scribner, 1995.